

編集後記

11号の特集は「国民・国家・食」である。企画編集を担当したのは、昨年、同題で開催したシンポジウムの企画者であったネイスン・ホブソンである。シンポジウムの報告から数編、さらに新たな論考も加えてお届けする。全五篇のうち三篇が翻訳論文であり、多彩なラインナップとなった。次号は、2020年1月に行った国際シンポジウム「文化としてのゴミ／Waste as Culture, the Culture of Waste」をもとに特集を組む予定である。食からゴミへ、生の問題系から死の問題系へ、人との、社会や環境と文化の関係を問い直す企画となる。次号特集もぜひご期待ください。また今回はワイドアングル論文というカテゴリーを設け、日本映画の研究状況を広く見渡す論考を掲載した。日本語の外でなされた日本研究を紹介する機会は、今後も積極的に設けていきたい。

さて『JunCture』にとって、2019年度の最も大きな変化は、既刊号のデジタル化を完了したことである。それにともない笠間書院での販売は終了したので、過去の掲載論文などにご関心をお持ち下さった方は、今後は名古屋大学リポジトリよりダウンロードしていただきたい。

今号のデザインも、これまで通り金武智子さんをお願いした。英語のネイティブ・チェックはトーマス・カバラさん、校正作業はセンターRAの梶川瑛里さんと游書昱さんをお願いした。みなさんのご協力があつて、今号も無事刊行することができた。感謝申しあげたい。

(飯田祐子)